

ケア役割とキャリアをめぐる「困難」 ——家族を介護する20代から30代女性の場合 松崎実穂

はじめに

2013年頃から日本では「家族を介護する若者」がヤングケアラー、若年介護者などと呼ばれ、¹ 注目されるようになった。各種メディアから取材されたかれらは介護を担っているためにライフコース選択の機会を逸し、キャリア形成における困難を抱えていること、また、友人ネットワークや学校から孤立し、介護に関する各種制度からも排除される存在として描かれている。メディア表象におけるそうした「困難」の描かれ方にはジェンダー差異があり、介護を担う若い女性の「キャリアにおける困難や選択」についてはあまり取り上げられていない（松崎, 2015）。介護を担う若い女性の「困難」の状況が重視されなければならない、介護を担うことの何が問題であるのかが不明瞭となる可能性に注意すべきである。² 本稿では以上に述べた問題関心から、若い女性のケア役割とキャリアをめぐる「困難」について考えてゆきたい。

本稿では第一に、近年の日本の若者研究における、家族のケア役割を引き受けている女性の青年期から成人期への移行についての先行研究を整理する。また英国におけるヤングアダルトケアラーに関する研究と、日本における青年期のケアラー研究における知見についても触れる。第二に、筆者が実施した、家族を介護する20代～30代女性へのインタビュー調査の内容を分析する。最後に以上の分析を踏まえ今後の課題について述べる。

筆者は現在、これまでに家族の介護を経験した、または現在も介護を行っている若者（介護経験時の年齢は10代～30代）へのインタビュー調査を進めている。ただし本稿において取り上げる対象者の介護開始年齢についてはいずれも20代である。本稿では、介護役割の引き受けからその終了まで、あるいは介護の続く現在に至るプロセスにおいて、調査対象者が介護役割と自分自身の人生のライフコースやキャリアについてどう考え、また実際にどのような行動を取ったのか等について分析する。

1 近年の日本の若者研究における「家族を介護する若者」

1990年代末期の若者雇用の不安定化を背景として、学校卒業から初就職という青年期から成人期への移行パターンに異変が生じ、無業者や非正規雇用者が急増した。そのためこの実態と構造を探る一連の研究がなされるようになった。ここで取り上げるのは、2002年から2008年の間で5回に渡り実施された高校卒業者の追跡インタビュー調査（東京都立大学・首都大学東京）を基にした研究成果である。³ 2010年前後に発表された成果において、全調査へ参加した31事例のうち、家族へのケア役割を引き受けている若者は3事例（堀さん一育児、若林さん一難病の母親と祖母を介護、吉川さん一知的障害の妹を世話。いずれも女性で、名前は仮名である）が報告されている。これら事例は、全てB高校（東京都内の下町地区で受験難易度がもっとも低い）卒業者である。また若林さんと吉川さんに関しては母子家庭である。さらに、若林さんの場合は生活保護受給世帯でもある。本稿ではケア役割の中でも介護について論じるため、以下では介護の事例（若林さん、吉川さん）を中心に見ていく。

宮島（2013）は以上の3事例をとりあげ、学卒後の生活でケア役割を担うことにより、移行のあり方がどのように規定されているかを論じている。また児島他（2010）では、若林さんの事例が取り上げられている。この二つの先行研究を通じたそれぞれの事例と分析を以下要約する。

若林さんは母親、妹、弟との4人で同居していた。若林さんは、以前から難病の母親の代わりに、家事仕事一切を妹とともに引き受けてきた。その一方で、若林さんの母親は、弟に対しては家事や介護を要請しない。若林さん一家は生活保護世帯でもあり、経済的事情は厳しい。若林さんは短大へ入学したが、その後の四年制大学への編入および、英語に関わる仕事への道等を断念した。その背景には、家事と介護という役割に加えて、生活全般について母親から過度の管理・干渉があった。短大卒業後は不安定な就労状況で働き続ける中、母親からの要請で、近居していた祖母と同居し、世話をすることになった。若林さん本人は、こうした状況について八方塞がりと感じており、また、自分自身が母親に暴力を振るってしまうのではないかとという危惧を抱いていた。また、生保受給のため世帯全体での収入を抑制する必要がある、その事情を理解してくれる職場でなければ働くことができない。かといって、若林さん

一人で独立することも難しい状況だった。短大卒業からさらに数年が経ち、祖母が他界したため、若林さんは実家に呼び戻された。だが、話し合いの末、親の借りたアパートで一人暮らしをすることになった。これは世帯分離をケースワーカーから助言されたことも背景にあると考えられる（児島他, 2010, pp. 29–33; 宮島, 2013, pp. 159–164）。宮島（2013）はこの若林さんの事例に関し、ケアの強要を生み出す要因として、ケアは女性がするものというジェンダー規範、母親の健康不安、生活保護を受給している家庭の貧困状態、母親との親子関係のあり方（支配というかたちの依存）、また若林さん自身が自分に頼る母親を放棄できないと感じていることを挙げている（宮島, 2013, pp. 165–169）。

次に、きょうだいをケアする吉川さんである。吉川さんは、母親、障害のある妹と暮らしている。母親と吉川さんは共に妹の日常的な介助を担っている（宮島, 2013, p.145）。吉川さんは、進学した専門学校で希望していた勉強ができず、学校を辞めざるをえなくなった。その後、不安定な仕事を渡り歩きながら、ずっと妹の介助を行ってきた。入浴など手段的な介助に留まらず、常に妹のことを考え、ケアを自分が将来的に担っていくことを考えている（宮島, 2013, pp. 170–171）。宮島は、吉川さんが妹のケアを続けて担おうとする見通しの裏にあった、それを方向づける要因を指摘している（宮島, 2013, p. 171）。第一に、妹のケアを外部的化したくないという思いから、介助を家族で抱えようという吉川さん自身の姿勢である。第二に、根強いジェンダー規範の存在である。「男性は安定した仕事に就いて稼ぐものだが女性は必ずしもそうではない」という性別分業イメージが、吉川さんがフリーターで居つづけながら妹のケアを担う、という吉川さん自身の考えにつながっていると分析されている（宮島, 2013, pp. 171–172）。第三に、吉川さん自身が経験してきた働き方の影響である。それまでの職場で目にしてきた正社員の理不尽な働き方は、吉川さんにはとても望ましいものに思えない。また正社員になったら仕事に時間が取られ、妹のケアが十分にできない。吉川さんが妹のケアをするためには、時間の融通が利く必要があるからである（宮島, 2013, p. 172）。このようなさまざまな制約が何重にもある状態の上で、将来的には妹を自分がみるという見通しを吉川さんは持っている。このことについて、宮島は「自分自身に対するいわば

折り合い」という（宮島, 2013, p. 173）。

児島他（2010）では、さまざまな家族における問題状況と不安定な就労状況の両方に置かれている女性7事例の検討が行われている（その事例の一つが若林さんである）。ここでは、まず①親の病気、介護等の家族問題の深刻さといった家族間問題と就労との関連が、就労を不安定にさせることが示されている。また、そのような状況においては、②家族問題に対して一定距離を取り、わずかながらでも自己の裁量権を持つことの余地や視点を可能にする、友人などのインフォーマルネットワークという足場を持つ重要性が指摘されている。この論考は、若者の青年期から成人期への移行における困難は、要因としての「家族問題」と、フリーター・ニートなど非正規雇用といった若者の就労の問題とが別々のものではなく、相互に絡み合っているという複雑性を示したものと見える。家族への介護を含むケア役割を担うことや、担わざるを得ない背景自体が、家族問題の一部として取り上げられ、それが若者の移行困難の要因となることが示されているのである。

また宮島（2013）は、子育てや介護・介助といった家族を支えるケアワーク全般が一般的に女性に偏って担われていることを踏まえつつ、こうした傾向が若い女性たちの移行過程にどのような影響を及ぼしているのかという実態を、移行過程の問題として問おうとした論考である。宮島は、堀さん（育児）、吉川さんの事例に関しては「ケア役割によって解決策のない状態に陥っているにもかかわらず、自分のおかれた状況に折り合いをつけ、『ケアされる人』とともに生きる見通しをもちはじめている」（宮島, 2013, p. 176）と見ている。一方で過重なケアを強いられている若者は、ケア役割に折り合いをつけることなどできず、自らの意味づけによって『ケアする人』にはなれていないとも指摘する。その上で「ケア役割に折り合いをつけ、自ら『ケアする人』としてケアワークにかかわれるようになること」が根本的に求められるという（宮島, 2013, p. 176）。この論考においては、宮島の関心は「ケア役割の遂行が移行過程の若者に及ぼす影響」である。そのため、若者自身による自らの役割や将来の見通しを考える中で、「ケア役割に折り合いをつけること」が重要であると指摘しているのであろう。ただし、事例が女性のみであること、またケア役割の女性への偏りや、ケアに関するジェンダー規範の存在、また不安定な就労

状況という背景を考えると、「ケア役割に対する折り合い」の背景に対しては、ジェンダー視点からのさらなる省察が必要ではないだろうか。

2 ヤングアダルトケアラーの移行に関する課題

英国においても、近年、家族のケアを担う子どもの成人への移行が注目されている。Beckerら（2008）によるとヤングアダルトケアラー⁴は、社会的交流の機会の制約、社会的サポートについての情報不足、勉強とケアのバランスをとることに対する要請、離家に関する複雑な問題に直面している（Becker, F. & Becker, S., 2008）。また男性に比較して、女性のヤングアダルトケアラーは、ケア役割の一部としての家庭運営の中心的な役割を年齢が上がるほどに引き受ける傾向があり、そのためにいっそうケア役割を離れる（離家するなど）が難しくなっているという（Becker, F. & Becker, S., 2008, p. 52）。

一方、日本における研究でも、森田（2010）は事例の検討を通じ、ケアを担う子どもが、青年期から成人期への移行にあたって直面している課題を明らかにすることの重要性を指摘している（p. 2）。また前節で参照した児島他（2010）では、若者に対する支援を就労支援に限定せずに、かれらの背景にある家庭問題などもカバーするような包括的支援の必要性が指摘されている（p. 42）。

先行研究では、青年期から成人期への移行において、家族へのケアを担うことが若者に与えている影響が示されていた。その状況に対し支援が必要だという点では、英国でも日本でも指摘されているといえる。

3 インタビュー調査とその内容分析

3.1 インタビュー調査の概要

本節では3名の女性の事例を取り上げる。いずれも18歳以上～39歳までの間に家族・親族の介護を経験している者（介護経験当時「若者」であった者ならびに、現在「家族を介護する若者」である者）である。3事例に共通する特徴としては、まず、首都圏在住で、四年制大学を卒業している（うち2事例は大学院を修了）。また、いずれの事例も介護開始時における年齢が20代⁵であり、当時被介護者（2事例：親、1事例：祖父母）と同居していた。インタ

ビュー調査は2014年から2015年に実施し、全て筆者が対象者と一対一で行った。インタビューは半構造化された形式で実施し、対象者の介護経験や、介護時と介護後それぞれの時点において、家庭や社会でどのような経験をしたのかを伺った。

以下では主に、インタビュー対象者が、介護と自分自身のキャリアについてに関わりに触れている部分を検討する。そして自らの介護役割がキャリアのあり方や、キャリアに対する考え方にどのように影響していると考えているのかについて示してゆく。なお、プライバシー保護のため、以下の項におけるインタビュー対象者の名前は全て仮名である。

3.2 介護を引き受けた時の状況とその後の経緯

今回取り上げる3事例は、それぞれ家族の介護をいつどのような状況において引き受けることになったのだろうか。

まず、高橋さん(39歳)は、23歳だった社会人1年目の時に、脳出血で倒れた父親(当時50代)の介護を始めている。高橋さんは一人っ子であり、両親と3人暮らしであった。当初は高橋さんの母親が主に介護にあたり、仕事の忙しかった高橋さんは補佐的立場だった。しかし27歳の時、母親(当時50代)が病気となり、長期入院した。高橋さんは父親の介護や諸手続きを一人で担うことになった。高橋さんは、母親が病気と判明する直前に転職をしていた。転職先では最初はアルバイトで入社していた。母親の闘病と、父親の介護負担が重なった間は、そのままアルバイトの立場でいた。母親の病状が落ち着いた後、正社員として雇用された。その後再度転職して自営業となり、30代で結婚して実家を出た。現在は高橋さん宅と同市内の実家で母親が父親を介護し、高橋さんは仕事と育児をしている。しかし、もし何かあれば、父親の介護が高橋さんに回ってくる可能性はある。

次に、鈴木さん(29歳)は、両親と同居する大学院生であったが、27歳の時に父親(当時70代)の認知症が判明した。母親(当時50代)は正規で働いており、多忙である。鈴木さんのきょうだいは皆、実家を離れている。鈴木さんは、学業のため、それまで続けていた非常勤の仕事をほぼ休んでおり、通院の付き添いや介護の諸手続きを一手に担うこととなった。現在、夜と週末は母

親がいるが、平日は鈴木さんが主に父親を見守る体制である。

次に、佐藤さん（28歳）は、大学院入学前の受験生であった25歳の時、家のリフォーム等がきっかけで、実家に近い祖父母宅に住むことになる。当時祖父母は共に90代。祖父は認知症の初期段階であったが元気であり、祖母は要支援ではあったが運動クラブにも通っていたという。同居開始当初は、祖父母の食事を作ってあげ、様子をみてあげれば十分であった。しかし翌年、祖母が入院し、自立歩行困難な要介護状態となった。また祖母の入院中に、祖父の認知症が進行し、佐藤さんが祖父の介助や見守りをした。その最中、佐藤さんは大学院に入学したが、ほどなく祖母も退院してきた。祖母の退院後の数ヶ月間には、佐藤さんの両親（母は正規で勤め、父は早期退職で主夫）、おば（祖父母の子ら）も介護に関わっていた。しかし、祖父母の主な介護者は佐藤さんという状況が続いた。その後、佐藤さんは両親に提案して祖父母の家を出、通いの介護に切り替える。インタビュー当時はほぼ介護から手を引いていた。以上が、今回の3事例における介護開始時とその後の経緯である。

以下の分析では対象者本人が自分自身のキャリアや人生、介護に対しての考え方を、家族への介護をしながらどのように考えていたかを中心に述べてゆく。

3.3 介護とキャリアの両立、キャリア選択について

高橋さんは、転職して「最初はアルバイトから」という条件で勤め始めた直後、父親の介護と母親の長期入院に一人で対処した。もし、母親の病气入院が入社前であれば「あぶれてたと思いますよ、完全に。職にはつけなかった、そのまま介護離職」（高橋さん）という。母親の病状が落ち着くまで約1年、アルバイトを続け、正規雇用された。会社にはよくしてもらったと感じている。しかし「そのまま母が死んだりしたら、父みなきゃいけないから、『そんなの正社員で雇うか』みたいなもの……わからないけど……だったのかもしれないですね」（高橋さん）という。また、アルバイトだった時期の仕事と介護の両立については、以下のように述べている。

持って帰って夜中に仕事をしたりとか、与えられたことはなるだけこなそうという。若かったからっていう。本当寝ないで、昼間は病院行ったり、父の世話をしたりしながら、夜中仕事したり、ちょっと母の病院行く前にやったりとかそんな感じ。(高橋さん)

当時の高橋さんは、もし仕事がこなせなければ解雇されるかもしれないと、また強く希望していた仕事であったことから、無理をしていたことが窺える。

鈴木さんは、介護が始まった当初、学業は進めつつも、家にいて父親の介護に対処した。だが、大学院修了のための論文を書かなくてはならず、「母のこと支えなきゃいけないとか、決めてかなきゃいけない、今後のこと考えなきゃいけない、けど学業も終わらせなきゃいけない。仕事のことも考えなきゃいけない」(鈴木さん)という状況で、パニックに陥った。その後大学院を修了し、学生時代からの非常勤の仕事にも復帰できた。しかし、現在は、自分がいなくなったら父親の通院すら難しくなること、そして全てが母親の負担となることが想定されるため、自分自身のキャリア上の選択肢が事実上狭まっていると感じている。

(前略) 例えば私が進学なりお仕事なりで東京っていうところを離れなきゃいけない、決定しました、これは多分私の将来的には大事なものです、みたいになった時には、母が全部自分で背負おうとするっていうのはわかってる。わかっているっていうか、そういうふうに感じているので、(中略) 自分の中で、選択肢から排除される形になってしまう。(鈴木さん)

また佐藤さんは、大学院に入学した前後で介護負担が重くなり、学業との両立で困難を感じた。また学業だけではない自分の時間の使い方や、今後のキャリアを考えたときに問題があると感じていた。

こういう生活してて、キャリア形成すごく難しい。「デイサービス

行ってるじゃない」っていうけどなんか役に立たない。時間のことにしてはね、役に立たない。だって5時に帰ってきちゃうんだもん。

〔調査者：確かにね。「こっちは5時に帰って来れないよ」っていう時にどうするっていうのがない。〕

そうですね、ない。いやまあ、どうするって一応ね、だから、縛りつけられるっていうか。(佐藤さん)

3.4 介護をする中での人生選択の変化

高橋さんは、介護が始まってからずっと、家族の介護都合を優先してきたが、その後30代で考え方を以下のように変えたという。

(前略) 本当はお父さんとお母さんには申し訳ないけど、多分自分の方が長く生きるし、母親にそうやって「家に早く帰ってくるように言われても」「やだ」とか言っちゃって、もちろん喧嘩とかになっても「どうかしてよ」とか言っちゃって(笑)。ひどいけど。ちょっと反抗期。(中略) もうなんか怒られてもいいから、若干両親を犠牲にしないと、なんか自分の人生ダメになるなんか思って、(中略) 実際遊んでも楽しくないんですけど、「両親を」犠牲にしていると。それでも「そういう風にしなきゃだめだ」って意図的に切り離す。(高橋さん)

また、佐藤さんは、介護事業者の選択や、家のリフォームといった、介護に関する決めごとについて、家族とのすれ違いを経験した。さらに、家賃や生活費が親持ちであることと、佐藤さんが主に介護をしていることに対しての親の見解に怒りを感じていた。その後、両親と話し合った上で祖父母の家を出た。介護の主な担当は両親にシフトしたが、佐藤さんは祖父母宅に週2回程度泊まる形で、介護や見守りをその後も続けた。

3.5 介護経験の中での将来への見通し、考え方の変化

高橋さんは会社員として勤めた後、自営業となった。だが、同じように自営業だった父親の介護を通じ、会社員として勤める方が病気になった時等は安心

だ、と考えるようになった。自営業の仕事を続ける中、一人っ子であったため結婚をしたいという思いもあり、婚活をした。その時は「結婚出来なかったらもう本当にスパーンと自営を辞めて、会社員になるくらい」（高橋さん）の気持ちであったという。自分自身の仕事の状況と、結婚との関連について、高橋さんは以下のように述べている。

なんか二択みたいな。切羽詰まった二択。結婚できなかつたら会社員に戻る。[転職と婚活] 両方一緒に。すごい転職サイト見たりとかしつつ、婚活サイトを見たりとか（笑）。（中略）結婚しないんだったらちゃんと保障のある仕事をしなきゃ、この国では生きていけない、みたいな。父をみて。（高橋さん）

鈴木さんは、父親の介護を通じて、将来の親の介護に対する考え方が変わったという。父親のことは以前から好きではなく、気持ちの上でさまざまな葛藤があった。だが、今は割り切って介護することができているという。しかし、大好きである母親に対しては、以前は「母が病気になっても何があっても私が支える」（鈴木さん）と思っていたのが「母が例えば認知症で、ってなったら私は多分介護したくない」（鈴木さん）と変化したという。それは、母親のことが好きであるからこそ、認知症になった母親と接することや、母親が鈴木さんを認識できないかもしれないことを「つらい」と感じると想像できるようになったからという。

一方佐藤さんは、祖父母の介護を通じ、親の介護や、自分自身への介護も含め、介護全般に「興ざめ」（佐藤さん）したという。佐藤さんは熱心に祖父母の介護に取り組み、在宅介護がやはり良いとも思っているのだが、同時に「在宅介護の痛いところ」（佐藤さん）をみたという。これが「興ざめ」につながっているのではないだろうか。佐藤さんは以下のようにいう。

家族の、今のシステムの中で、家族の人間関係だとか個人の、私のキャリアとかいう点から見たら、在宅、言ったら死んで行く人間たちに対してかけてる労力に対してあまりにも釣り合いが取れてない、影響が

大きすぎるし、例えば十円ハゲできちゃうのも困った話だし、非常に精神衛生面がよくない。キツイ、しかも先が見えなすぎる【原文ママ】。
(佐藤さん)

介護経験を通じて、佐藤さんは、「自分のような若い人が家族の介護をするべきではない」と感じるようになった。その理由として、佐藤さん自身は、ケア責任の重さ、また若い人のキャリアを介護が阻害することを指摘する。

(前略) 私の1時間のほうが彼女たち(仕事をしている母やおば)の1時間より、なんだろう、高い1時間なんじゃないの?みたいな。キャリア形成の途中だから。(中略) [キャリアが] 決まっちゃってる人の1時間と違うでしょう。これで人生変わるからどうなんだろう。若い子の時間っていうところは。私なんかはやっぱり親世代の1時間と違う気がする。(中略) 価値は違うと思うから。若い介護者の時間っていうのは、奪っている物が大きすぎると思いますね。(佐藤さん)

3.6 小括

今回取り上げた3事例は、大卒後の社会人や、大学院生であり、介護が始まったのはいずれも20代に入ってからである。先行研究で取り上げた、高校から仕事への移行期における、ケア役割の遂行と就労との関わりにみられる困難を経験している事例とは、年齢層、社会的立場、学歴などの資源も異なる。しかし、成人期に移行後と見なされやすい社会的立場(社会人や、四年制大学を卒業している状態)や、年齢層であっても、これら3事例をみる限りでは、介護と仕事・学業の両立に関する困難は見られた。たとえば、高橋さんはアルバイトを、身体的も精神的にも無理しながらこなしていた。また、鈴木さん、佐藤さんは、受験準備で無職だった時点や学生であった時点に介護が始まり、その後の学業に強い支障を感じていた。

キャリア選択に対する介護の影響を考えると、まず、就職していた高橋さんに関しては、早く正社員になりたいとも、ケア責任が重い間は時給で働くアルバイトという立場でいた。こうして、キャリアと介護との間でバランスを取っ

ていたのである。しかし、途中から自己犠牲をやめ、自分の人生のために行動した。高橋さん自身は、その選択が今の結婚につながったと感じている。

鈴木さんは父親の介護が続く状況で、これからのキャリアの選択肢が狭まっていると感じている。それには、鈴木さんが介護を担わなくなれば、残った母親が介護負担を全て負ってしまうことが予想できるだけに、それを避けたいという鈴木さん自身の思いがある。それを考えると、実家から遠く離れたり、なかなか家に帰れなかったりする仕事は選べないのである。また、佐藤さんは祖父母の家を離れ、ケア責任は家族メンバーに分散したが、介護に費やす時間の犠牲は、自分自身の将来を考えるととても大きく、若い人は介護をするべきではないと思うようになった。

また、鈴木さんは将来の母親の介護に対し、佐藤さんは将来の親の介護と自分自身が介護されることに対して、介護経験を通じて考え方に変化が生じた。

今回は、いずれもの事例も、介護開始時にはすでに成年となっている。だが、介護を引き受けたことがその後のキャリア選択に与えた影響は大いにある。また、高橋さんの語りにあるように、家族の介護を引き受けている若者が、自分自身のやりたいことを追求するためには、思い切って自己犠牲をやめなくてはならないが、そのことで、他の家族（被介護者である家族や、共同の介護者である家族）にも変化を強いること——つまり、自分自身の将来を優先することが、家族を犠牲にすること——が引き替えになっていることを、若者自身が受け入れなくてはならないということが窺える。また、今回の3事例はいずれも、家族への介護という経験を通じ、将来の親への介護や自分自身への介護といった、先々のことに関しても具体的に考えるようになったり、自分自身の介護に関する気持ちの変化を感じていたりしている。

4 おわりに

本稿では、移行過程中や、成人への移行後と見られがちな就職後、高等教育以降の段階において、家族を介護する若い女性に何が起きているのかを、先行研究のレビューと筆者自身によるインタビュー調査の内容分析を通じて検討し、今後の研究や調査に向けての予備的な内容整理を行った。その上で本稿の限界および今後の研究における課題について最後に触れておきたい。

本稿の限界としては第一に、先行研究における事例と比較して、本稿で取り上げたインタビュー対象者は年齢層が上であり、属する社会階層（学歴や経済状況等）が異なることが挙げられる。このため、先行研究と本稿の事例を単純に並列して「家族を介護する若者」として論じることはできない。今後は年齢層や社会階層差による相違、また共通することにも注目して研究を進める必要がある。

第二に、先行研究および本稿の事例は女性に限られていることである。今後の研究においては若い男性のキャリアと介護役割についても注視する必要がある。

現時点での限界と課題を踏まえ、今後はインタビュー調査対象を広げ、さらに分析を進めていきたい。

Footnotes

- ¹ 1980年代末から行政的対応や支援がはじまった英国では、こうした子どもはヤングケアラー (young carer) と呼ばれる。ベッカーはヤングケアラーを「家族メンバーのケアや援助、サポートを行なっている (あるいは行うことになっている) 18歳未満の子ども。こうした子どもたちは、恒常的に、相当量のケアや重要なケアに携わり、普通は大人がするとされているようなレベルの責任を引き受けている。ケアの受け手は親であることが多いが、時にはきょうだいや祖父母や親戚であることもある。そのようなケアの受け手は、障害や慢性の病気、精神的問題、ケアやサポートや監督が必要になる他の状況などを抱えている」(Becker, 2000 / 2010) としたが、年齢や関わるケアの量に関して議論があり、より広い定義を取っている民間団体もある (三富, 2008, pp. 282–283)。またBecker (2010) は、成年への移行期にあたる16歳から24歳までを young adult carer としており、必ずしも18歳という英国における法的な成人年齢と整合性のある定義とはしていない。近年日本でも「ヤングケアラー」という語が使われはじめたが、現状では中高年以外の比較的若い介護者全般に対して、未成年・成年の別を問わず使われており、定義については未整理のままである。
- ² 一方家族の介護を担う若い男性が、「介護によって失ったもの (彼らのキャリア) を取り戻す方向に動くべき」とされるのであれば、それにより彼らにどのようなプレッシャーがかかるのか、またキャリアが「取り戻」せなかった時にどうなるのかについて検討する必要がある。
- ³ これらの調査概要については乾 (2013) 参照。
- ⁴ 註1を参照。
- ⁵ インタビュー実施当時の年齢は20代が2名、30代が1名である。
- ⁶ インタビューの語りの引用中、[] 部分は筆者による補足である。注釈が必要な箇所は【 】で示した。

References

- Becker, Saul. (2010). 「家族ケアを行なう子ども（ヤングケアラー）の定義」. (澁谷智子, Trans.). 『澁谷智子のホームページ』. (最終アクセス2015/8/30) <http://shibuto.la.coocan.jp/sub7.html> = (Original work published 2000). 'Young carers', in Davies, M. (ed). *The Blackwell Encyclopaedia of Social Work*. Oxford: Blackwells, p. 378.
- Becker, F. and Becker, S., (2008). *Young Adult Carers in the UK: Experiences, Needs and Services for Carers Aged 16–24*. London: The Princess Royal Trust for Carers.
- 乾彰夫. (2013). 「若者たちの移行に寄り添う」. 乾彰夫編『高卒5年—どう生き、これからどう生きるのか』. 東京：大月書店, 9–36.
- 児島功和, 藤井（南出）吉祥, 船山万里子, 宮島基. (2010). 「若者の移行における困難の複雑性：就労および家族問題に着目して」. 『人文学報. 教育学』. 45, 23–45. <http://hdl.handle.net/10748/3914>
- 松崎実穂. (2015). 「メディアにみる「家族を介護する若者」——日本における社会問題化を考える」. 『Gender & Sexuality』. 10, 187–201.
- 三富紀敬. (2008). 『イギリスのコミュニティケアと介護者—介護者支援の国際的展開』. 京都：ミネルヴァ書房.
- 宮島基. (2013). 「家族を支える女性たち——若者の移行とケアワーク」. 乾彰夫編『高卒5年 どう生き、これからどう生きるのか』. 東京：大月書店, 145–180.
- 森田久美子. (2010). 「メンタルヘルス問題の親を持つ子どもの経験—不安障害の親をケアする青年のライフストーリー」. 『立正社会福祉研究』. 12 (1), 1–10.

Difficulties Faced by Caring Roles and Careers
—Case Studies of Women in their 20s–30s Who Care Family Members
Miho MATSUZAKI

In the 2010s, young people who care family members started to receive attention in Japan. These young people, who began appearing in various forms of media, lost the opportunity to choose a life course due to their caring roles, and thus experience difficulties in forming a career path. Moreover, they are depicted as being isolated from schools and peer networks, and are excluded from a multitude of systems related to caring. There is a gender difference in how these difficulties are depicted, however, in that they rarely feature problems or decisions surrounding career paths for young women who have undertaken carer roles. For this reason, it is necessary to conduct a qualitative analysis that thoroughly analyzes the individual experiences of actual young people who care their families.

This paper will summarize the issues at hand by first reviewing the literature on young people in contemporary Japan, and in particular on women who perform caring roles and who are transitioning from adolescence to adulthood. This paper will also discuss the findings of research on young adult carers in England. Second, while referencing the issues summarized above, this paper will analyze interviews conducted by the author with women in early adulthood who care family members (who began caring in their 20s) .

The cases treated in the literature review and the subjects interviewed in the author's survey differ in terms of age, history of becoming a carer, and social class. There may be a large disparity in how these factors impact a person's life course. However, there are also similarities in the problems they have experienced until now, as well as those presumed to occur in the future.

In addition, the subjects interviewed by the author are both older and come from a higher social class compared to the cases in the literature review, but through their caring experiences, they are changing the way they think about their own futures, lives, and caring in general.

To summarize the literature review and interview case study, the effects that caring has on a person's career or life course are truly diverse. Consequently, it is necessary to perform additional research and analysis on young people—especially women—who care family members, as well as the effects caring has on life courses and careers after caring has ended.

Keywords:

young people who perform caring roles within their families, young women in early adulthood, young carer, young adult carer, career

